

## 講堂

講堂は東寺の宗教教育の中心地であり、寺院の最も重要な宝物の1つを収納している。そのほとんどが9世紀のものである21体の佛像から成る、佛教の宇宙論を描いた立体的な画である。

空海（774-835）が824年に別当になったとき、彼は中国で学んだ密教の教義を教えることができる場所として1つの間を建造した。インドの佛教に起源を持つこの伝統は、隠された知識と儀式、マントラ（真言）の詠唱、そして佛教の宇宙の視覚的表現であるマンダラの研究を強調していた。講堂内の諸佛像は、大きな立体曼荼羅として配置されている。

空海が建てた元の講堂は、東寺のほとんどの建物を焼失させた1486年の火事で失われた。火事から5年後の1491年に再建され、この建物はいまだに元の講堂の礎石の上に建っている。21体の木製の佛像のうち、15体の佛像が現存しており、後に再建された1体の仏像を含め、国宝に指定されている。